

究室発行)では「辞書活用法」の特集が組まれていますのでそちらもご覧下さい。

では、最後にこのエッセイの付録として課題を差し上げましょう。次の文章の下線部を辞書を用いて和訳して下さい。これは、Somerset Maugham (英国の劇作家)の *A Writer's Notebook* からの文章です。少し内容が難解な英文ではありますが、英文をみる目を養う練習になります。

Our conduct towards our fellow-men is determined by the principle of self-preservation. The individual acts towards his fellows in such and such a manner so as to obtain advantages which otherwise he could not get or to avoid evils which they might inflict upon him. He has no debt towards society; he acts in a certain way to receive benefits, society accepts his useful action and pays for it. Society rewards him for the good he does it and punishes him for the harm.

語研ニュース読者の学生さん中でこの和訳の添削を希望される方は、筆者のところまで持ってきて下さい。個人添削します。

## ロンドンで世界一のミュージカル『レ・ミゼラブル』を楽しむ

経営学部

太田 幸治

### ロンドンは、ミュージカルの街

『キャッツ』、『オペラ座の怪人』、『マンマ・ミーア』、『レ・ミゼラブル』。ミュージカルに興味がない人でも、これら作品タイトルのうち、1つか2つのタイトルくらいは聞いたことがあるだろう。これらのミュージカルには共通点がある。それは、これらはすべてロンドン産であるということ。

ミュージカルの街というと、ニューヨーク (=ブロードウェイ)を思い浮かべる人がほとんどではないだろうか。しかし、イギリスはロンドンのウエスト・エンドでもたくさんのミュージカルが製作、上演されており、ウエスト・エンドの劇場は、地元の演劇、ミュージカル・ファンばかりではなく、世界中のミュージカル・ファン、そしてロンドンを訪れる観光客でいつも賑わっている。ウエスト・エンドで上演される演劇は、台詞だけの劇=ストレート・プレイのみならず、ミュージカルにおいてもかなりハイ・クオリティのものが上演されている。それもそのはず、イギリスはシェイクスピアを生んだ国。もともと演劇への感度が高いのである。

このエッセイは、ミュージカル好きの筆者が、ミュージカル好きになった理由と、昨夏ロンドンで観た世界で最も長く上演され続けているミュージカル『レ・ミゼラブル』の感想を綴ったものである。

## 筆者とミュージカルの出会い～出会いは、『ミス・サイゴン』

そもそも筆者が、ミュージカルに興味を持ったのは今から15年前の大学1年生の時。今以上に純粹で初心<sup>うぶ</sup>であった18歳の筆者は、今となっては恥ずかしいが映画監督を目指しており、いい映画を撮るためには映画の知識が必要だと信じ、1週間に3本の映画を映画館で見ていた映画バカであった。にも係わらず、大学1年生の夏休みになる頃、「東京に住んでいるのだから、大きな劇場で芝居くらいは見ておきたい。」と感じ、当時帝国劇場で上演されていた『ミス・サイゴン』を見に行くこととなった。なぜ、映画にしか興味がなかった当時の筆者がミュージカルを見に行ったのか、今思うと2つのことがきっかけだったように感じる。ひとつは、筆者が高校生の頃、映画評論家の故・淀川長治さんが「映画しか見ない人は、単なるバカです。映画を楽しむためには舞台やバレエ、美術などの他の芸術の知識があったほうがいい。」といていたのをどこかの記事で読んだこと。いまひとつは、高校卒業直前に何気なく見ていた朝のワイド・ショーにゲストで出ていた市村正親さんが『ミス・サイゴン』の魅力を熱く語っており、その市村という俳優に興味を持ったからだろう。市村正親さん、いまでこそ人気女優の篠原涼子さんのかなり年上のご主人ということで有名だが、いまから15年前はテレビには全く出演しない舞台俳優であった。高校生までは静岡県浜松市の北にあるど田舎に住んでいた筆者。自分はこんな田舎にはいてはいけない。大学では東京に行って楽しいことを思いっきりするんだと思っていた時期に、それまで全く知らなかった舞台の魅力、いやミュージカルの魅力を暑苦しく語りまくるサービス精神が旺盛な市村正親という俳優に何かひかれるものがあったのだと思う。

そして『ミス・サイゴン』の観劇である。いまだに忘れられない。約2000席ある帝国劇場。2階席の最後列。舞台に向かって一番左端の舞台から一番遠い席での観劇であった。初めて見るミュージカル。始まる前から興奮していた。とにかく広

い劇場。筆者の席は舞台からはかなり遠いが、舞台の前のオーケストラ・ピットが開幕前に楽器をチューニングするのを聴いて、この後、生演奏で進んでいくであろうミュージカルの贅沢さにワクワクした。そして開幕。結論から言うと、人生で初めて観る本格的ミュージカルが、この作品で良かったと思う。『ミス・サイゴン』は巨大なホーチミン像や実物大のヘリコプターが出てくるような重量級の舞台装置を使った大掛かりな作品であると同時に、ドラマと音楽とセットが三つ巴となって猛烈な迫力で客席を圧倒するミュージカルだったからである。映画鑑賞では間違いなく味わえないライブ感。2000人のためだけに、踊り、歌い、熱演するすべての出演者たち。観劇中、心が震えっぱなしだった。そして市村正親である。彼の舞台を引っ張る存在感のすごさ。先にも示したとおり、筆者の席は2階席の一番後ろの左側。この劇場で舞台から最も遠い席である。そこに座っている筆者の目に、市村正親は大きく見えた。感覚的には彼がクローズ・アップで見えた。この舞台を見て、筆者は市村正親とミュージカルという演劇形態に取り憑かれてしまった。

一方で、筆者の映画を見る本数は、ミュージカルを見る本数が増えるにしたがって減少していった。それもそのはず。お金が続かないのである。

しかし、不思議なもので、女の子とデートする回数は、ミュージカルを見に行くようになってから増えた。女性は映画好きな男性よりもミュージカル好きな男性のほうが好きなのかもしれない。女性に「ミュージカルを一緒に見に行かない？」と誘うと、かなり高い確率でデートにこぎつけることができた。女性は、舞台、とかくミュージカルという華やかなものに魅力を感じるのかもしれない。この語研ニュースを読んでいるモテナイ男子学生諸君。ミュージカル観劇を趣味にすると人生が変わるかもしれないよ。筆者は人生が変わってしまった。以前、私のミュージカル鑑賞熱が最も高かった時代に、ある女性とデートをした。その女性と付き合い始めて最初のクリスマス。私たちカップルは、12月23日、24日、25日と3日連続

で帝国劇場に『レ・ミゼラブル』というミュージカルを見に行った。3日間も同じ作品を見続けるなんて、普通の神経ではできない。私はマニア以外の何者でもなかった。そんな私の趣味に3日間も付き合ってくれた女性は、現在筆者が最も恐れる、いや愛する女性=妻である。

### ウエスト・エンドでミュージカルを観る。

前置きが長くなってしまったが、いよいよロンドンの話に入ろう。

ロンドンの街で人が賑わっているといわれるのは、金融街であるシティと繁華街であるウエスト・エンド。劇場があるのは、ウエスト・エンドの方。約40軒もの劇場が、ロンドンのヘソ、ウエスト・



写真1：早朝のピカデリーサーカス ここがこんなに空いているのは、早朝と深夜のみ。ロンドンのヘソは観光客でいつも賑わっている。



写真2：ピカデリーサーカスにつながるリージェント・ストリートとロンドン名物のダブルデッカー（赤い2階建てバス）

エンドのヘソと呼ばれるピカデリーサーカスから徒歩10分圏内に立ち並んでいる。ゆえに、ロンドンの中心部を歩いていると、演劇、ミュージカルの看板にやたらに遭遇する。また、ロンドンといえば、おなじみの赤い2階建てバス（ダブル・デッカー）に貼られている、ミュージカルのポスターを観ると、ロンドンをつくづく演劇、ミュージカルの街であることが分かる。

筆者がロンドンを訪れるのは、昨年夏で3回目。1回目は2000年の夏で、ポルトガルに学会発表にいった際にロンドンに立ち寄り、『オペラ座の怪人』、『レ・ミゼラブル』、『キャッツ』の3本のミュージカルを観てきた。2回目は、2001年の春。このときは、マーケティング研究の大御所である和田充夫先生と一緒にいた。当時の筆者は、和田先生をリーダーとしたアート・マネジメントの研究会に参加しており、アート・マネジメント研究・教育の先進国であるイギリスにヒヤリングに行った際にウエスト・エンドで『レ・ミゼラブル』と『オペラ座の怪人』を鑑賞した。この舞台鑑賞は2本とも和田先生とご一緒させていただいた。和田先生が、ダフ屋と交渉して『レ・ミゼラブル』のチケットを安く入手したこと、観劇後、2人で芝居の感想を語り合いながら夜のロンドンの街を歩いたことは一生の思い出である。

そして、昨年夏。妻と、『オペラ座の怪人』、『レ・ミゼラブル』、『メリー・ポピンズ』を観て来た。

ロンドンへ行くたびに、『オペラ座の怪人』と『レ・ミゼラブル』を観ているのではないかと思われる方も多いただろう。その通りである。私はロンドンに3回しか行ったことがないが、ロンドンで『オペラ座の怪人』と『レ・ミゼラブル』を各4回ずつ見ている。もうお分かりだろう。それほどまでにこれらの作品が好きなのである。

ちなみに、日本版の『オペラ座の怪人』は、94年冬に札幌で観て以来、今年の大坂まで14年の間に50回近くは観ていると思う。同じく日本版の『レ・ミゼラブル』も、94年冬の名古屋公演から昨年6月の東京公演まで100回近く見ているので



はないだろうか。はっきり言おう。2作品とも、やれといわれれば完璧に出来る自信がある。台詞、動きともに完璧に頭に入っている。ただ、正確な音程で歌えるかは保証の限りではない。

先にも書いたとおり、ロンドンの街の中には約40の劇場がある。どの劇場も、ロンドンの街並みに溶け込むようなクラシカルでそして重厚な建造物である。『オペラ座の怪人』を上演している Her Majesty's Theatre は、1705年にオープンした歴史のある劇場である（写真3）。外見はクラシカルでも中では、ハイテクを用いたミュージカルが上演されている。



写真3：『オペラ座の怪人』が上演されている Her Majesty's Theatre。夜にはこのようにライトアップされる。

### ミュージカル版『レ・ミゼラブル』

世界で最も長く上演されているミュージカルが、ロンドンの『レ・ミゼラブル』である。1986年に開幕したこの作品は、今年で22年目のロングランになる。筆者がこの作品を2000年、2001年に観劇したときは、Palace Theatre で上演されていたが、2004年から Palace よりも少し小さめの Queen's Theatre に劇場を移して上演され続けている。

ミュージカル版『レ・ミゼラブル』について解説しよう。ヴィクトル・ユーゴーの原作本は、日本では『ああ無情』というタイトルで翻訳されており、その大著を読んだことがある方もいるだろう。

ミュージカル版の『レ・ミゼラブル』も原作同様に、ジャン・ヴァルジャンの物語である。パン



写真4：『レ・ミゼラブル』が上演されている Queen's Theatre。この劇場がある通りはとりわけ劇場が多く、複数の劇場が隣接している。隣の劇場では筆者が行く1週間前までハリウッドスターのダニエル・ラドクリフ主演の『エクウス』が上演されていた。

を1つ盗んだだけで19年も牢獄暮らしを強いられたジャン・ヴァルジャンは、仮出獄で出所した。しかし囚人のヴァルジャンに世間は冷たい。そんななか唯一彼に優しくしてくれたのが司教。司教が優しくしてくれたにも係わらず、ヴァルジャンは、恩を仇で返すように、司教のもとから食器を盗んで逃亡する。すぐに警察に捕まったヴァルジャンを、司教は責めるのではなく、「その食器は私が彼にあげたものだ。そして、銀の燭台しよくだいを彼は忘れていった。」と彼のことをかまう。さらに、司教は、これを使って真人間になれと銀の燭台をヴァルジャンに渡すのであった。自分に優しくしてくれた司教を裏切ったことを情けなく思ったヴァルジャンは、生まれ変わることを決意する。仮出獄の許可証を破り捨て、別人になりすまし、こつこつと働くようになった。

名前を偽りながらも真面目に働き、小さな町の市長にまでなったヴァルジャンは、市が経営している工場で働いている女性ファンティーヌと出会う。ファンティーヌにはコゼットという小さな娘がいるが、自分では育てられずに田舎町の宿屋に娘を預けて育ててもらっている。娘がいたことを隠していたことがばれ、工場をクビになったファンティーヌは、娼婦になるが、病気で死んでしまう。ファンティーヌの娘のコゼットを責任を持って育てると誓うヴァルジャン。しかし、仮出獄の

許可証を破り捨て逃げ続けているヴァルジャンには、彼を執拗に追いかける刑事ジャベールが迫っていた。

ヴァルジャンは、ジャベールの追跡をなんとか振り切り、コゼットを育てた。

10年後、ヴァルジャンとコゼットは、パリでひっそりと暮らしていた。コゼットは、パリの街で学生マリウスに一目惚れする。マリウスもコゼットに一目惚れしてしまう。2人の愛は確認されるが、そこにもヴァルジャンを追うジャベールの影が。ヴァルジャンはジャベールから逃げるべく、パリを去ることをコゼットに告げる。それを聞いていた、マリウスは、コゼットとパリを去ることを選ばずに、仲間たちとともにフランス革命に参加することを決意するのであった。そして…。

以上がミュージカル版『レ・ミゼラブル』の前半部分のあらすじである。

このミュージカルは、一般的なミュージカルと2つの面で大きく異なっている。ひとつは、全編歌で進行すること。それゆえに、突然歌いだしたり、踊りだしたりする一般的なミュージカルとは一線を画す。いまひとつは、重くて暗いこと。一般的なミュージカルは、きらびやかな衣装と照明、そして明るく楽しい音楽で物語が進んでいくのだが、このミュージカルは正反対で、音楽も照明も大変暗くて重い。

こんな内容にも係わらず、なぜ、『レ・ミゼラブル』がロンドンで、いや世界でもっとも長く上演され続けているのだろうか。筆者は、観るたびに感動するポイントが変わるミュージカルだからと理由づけている。筆者自身、ミュージカル版の『レ・ミゼラブル』を100回くらい観ているが、観るたびに楽しめるポイント、感動するポイントが違う。ある時は、ヴァルジャンの苦悩に涙し、ある時は、ヴァルジャンの優しさと偉大さに賞賛を与えた。またある時は、フランス革命に向かう＝死に向かう学生達の生き生きとした笑顔に切なさを感じたこともある。そして、またある時は、ジャベールの信念を貫く姿勢にセクシーさを感じたことも。もちろん、観るたびに演じる役者が違うか

ら感動するポイントが変わることもあろう。だが、それだけではない。この作品で描かれている登場人物たちが魅力的だから毎回異なる感動があるのではなからうか。

このミュージカルの登場人物は大変多い。主要登場人物が8人いる。その8人の物語が絡み合いストーリーが進んでいく。ヴァルジャンは逃げ、ジャベールは追い、それにフランス革命が絡み、マリウスとコゼットの恋愛も絡むという複雑構造。この複雑構造の話で描かれるのは、登場人物たちの救いのなさ。原作本の邦題タイトルのように「ああ無情」な世界が描かれる。「ああ無情」の世界で生きている登場人物たち。彼らの人生には救いが無いのだけれど、皆それぞれが生きている間は必死に生きている。それぞれの価値観を全うしようと必死で生きている。このそれぞれの登場人物たちの生き方に共感する人が多いからこそ、この作品が世界で最も長く上演されるミュージカルになるのだと感じている。

#### 『レ・ミゼラブル』日本公演とロンドン公演

日本版の『レ・ミゼラブル』は、1986年初演で、今日まで断続的に上演が繰り返されている。また来年（2009年）3月には名古屋栄の中日劇場での上演も予定されている。

実は、昨夏ロンドンに立つ前日、筆者は東京で『レ・ミゼラブル』を観劇している。私が観劇したのは日本公演20周年特別キャストで、ジャン・ヴァルジャン役は別所哲也さん、ジャベール役は鹿賀丈史さんであった。この2人の熱演が舞台を引っ張り、日本公演としては十分満足できるものであった。とりわけ印象に残ったのがジャベールを演じた鹿賀丈史さん。鹿賀さんは、初演時にヴァルジャンとジャベールを滝田栄さんとともに交互に演じ、その後の再演からは長い間ヴァルジャンのみを演じていたが、2005年の再演では18年ぶりにジャベールを演じ、今回の公演でも数回のみスペシャル・キャストとしてジャベールで登場した。ヴァルジャンをスティックに追いかけるジャベールを冷徹にそしてセクシーに演じた鹿賀さんのジャ

ベールは絶品であった。

そしてロンドンの『レ・ミゼラブル』である。ジャン・ヴァルジャンを演じたのは、John Owen Jones。彼は、26歳という若さでウエスト・エンドのヴァルジャンを演じ、このとき世界で最も若いヴァルジャン役者といわれた実力派俳優。その後、29歳のときに『オペラ座の怪人』のタイトルロールに抜擢され、ウエスト・エンドで4年間、1400回も怪人役を演じていた。そして、再び、2006年からウエスト・エンドのヴァルジャンに抜擢されていた。ミュージカル・マニアからすると、ヴァルジャンと怪人の両方を、しかもウエスト・エンドで演じることができる俳優は、超一流の役者である。この俳優はまさにそう。歌は上手いなんてものじゃない。難しい『レ・ミゼラブル』のヴァルジャンのナンバーを完璧に歌い上げつつ、役者としてヴァルジャンを見事に演じていて、彼の演技に鳥肌が立った。

一方、ヴァルジャンを追うジャベールは、Hans Peter Janssens というベルギーの俳優。この俳優もすごい。筆者が2000年にロンドンで観たときにはヴァルジャンを演じていた俳優である。そのヴァルジャンが、今度はジャベール役で登場したのである。彼はウエスト・エンドでヴァルジャンとジャベールを演じた唯一の俳優である。鹿賀さんと同じで、ヴァルジャンを演じた後に、ジャベールを演じる俳優は、とにかくカッコイイし、役作りが深い。ヴァルジャンとジャベールは太陽と月という関係にあることがよく分かる役作りだった。

演技も歌も完璧にこなす2人の名優が演じるヴァルジャンとジャベールは、大迫力の対決を見せ、舞台全体をぐいぐい引っ張っていった。また、脇役からアンサンブル（その他大勢の役）まで全員の俳優のレベルが高かった。

ロンドンで『レ・ミゼラブル』を上演している Queen's Theatre は東京でこの作品が上演されている帝国劇場よりも舞台も客席も狭い。にも係わらず、舞台セットの大きさはほとんど同じだし、出演者の数も同じだから、客席に伝わる迫力が東京の比ではなかった。

役者たちの熱演、それが伝わる劇場により、大感動したロンドンで観る3回目の『レ・ミゼラブル』。あまりの感動に、6日間のロンドン滞在の最終日に再び Queen's Theatre に出かけてしまったほどである。

是非、ロンドンでミュージカルを観ることをお勧めする。ロンドンでも、『ライオン・キング』や『美女と野獣』などのアメリカ産ブロードウェイ・ミュージカルは上演されているが、ロンドンでは、是非ロンドン産のミュージカルを鑑賞して欲しい。そして、その中でも『レ・ミゼラブル』をとりわけ見て頂きたい。筆者はこれまでに、ロンドンで『レ・ミゼラブル』を4回観たが1度の外れもない。常に大当たりのミュージカルである。ロンドンで『レ・ミゼラブル』を楽しむために、来年3月に中日劇場で上演される日本版で予習されることも併せてお勧めする。日本版も最低2回観たほうがいい。それくらい、奥が深いミュージカルである。最後に、もう一度声を大にして言おう。ロンドンではミュージカル『レ・ミゼラブル』を観ることをお勧めする。ロンドンにこの作品を見に行くだけでも往復の飛行機代は無駄ではない。